

## 上古音の開合と戦国楚簡の通仮例

古屋昭弘

### 1. はじめに

戦国出土文字資料の公開が増えるにつれ、今までの知見のみからでは理解しにくい通仮の例が益々多く見られるようになり、韻部と声母の情報のみで通仮字の同定作業を進めることの問題点も浮き彫りになっている。声母と韻部が全く同じでも通仮できない場合もありうるし、反対に一定の条件を満たせば全く異なるかに見える声母を持った字同士の通仮もありうる。特に問題となるのが「開合」である。一般に声母と韻部が同じか或いは通用範囲にあっても、開合が異なれば通仮の可能性は低くなるとよく言われるが<sup>(1)</sup>、開合という概念自体の定義が問題となる。前稿(古屋 2003)では以下のように書いた：

同声母・同韻部でも介音-uを含む字(合口字)と含まない字(開口字)の間では通仮の関係が成り立たないのが原則。中古模韻の「姑」と「孤」のように、中古では全くの同音字でも上古では開合が異なる場合があるので要注意(「姑」は開口、「孤」は合口)。

今から考えると、この説明には昨今の上古音の学説に適応できない不十分なところがあった。そもそも、この中で言う「開合」が中古音のことなのか上古音のことなのかさえ曖昧であった。たとえば、最近の上古音の学説では、中古開合の区別が牙喉音系声母の字に多く現れることから、その区別を声母に負わせることが多い。李方桂『上古音研究』は牙喉音系の声母を以下のように再構している：

k kh g hng ng ? h  
kw khw gw hngw ngw ?w hw (以下、この系列を Kw-と総称)

先の例によれば「姑」は ka (声母 k-と韻母-a)、「孤」は kwa (声母 kw-と韻母-a) のように再構される。この二字は中古音で全く同音となる。このような場合、『姑』は開口、『孤』は合口」と言えるかどうか問題となる。韻母の開合というと不正確になるからである。また現在の

学説の多くが、中古音舌歯音合口に対応する上古音（元部や歌部など）に「円唇母音」を認めるが、その場合、たとえば「坐」*dzojʔ*（*dzuarx*ではなく）は合口と言えるであろうか。そこで本稿では「声母 Kw-と韻母-a」或いは「坐」*dzojʔ*のようなものも含めた言い方として「合口的要素」という術語を用い、先ほどの説明を以下のように代えてみたいと思う。

上古音において二つの字が同声母あるいは類似した<sup>(2)</sup>声母を持ち且つ同韻部あるいは対転の関係にある韻部に属するとしても、合口的要素（声母 Kw-、円唇主母音など）を持つ字と持たない字の間では通仮の関係が成り立たないのが原則。

このことは「通仮の関係」を「諧声の関係」に置き換えれば、諧声符（声符）の系列の状況にも当てはまると思われる。本稿では上古の通仮・諧声符・押韻などの問題を開合の概念と関連させつつ考えてみたいと思う。

## 2. 諧声系列について

周知のことながら、諧声符を含む所謂「形声文字」は殷の甲骨文字の段階で既に27%ほど見られ、西周になって激増、後漢の『説文解字』の段階では形声文字の割合は全体の80%ほどに及ぶ<sup>(3)</sup>。諧声符を等しくする漢字群を諧声系列という。清朝考証学や B.Karlgren 以来の上古音研究に拠れば、諧声符となる字と同声母あるいは類似した声母を持ち且つ同韻部あるいは対転の関係にある韻部に属する字が諧声系列を為す。

不思議なのは、Karlgren や李方桂の再構音に拠ると、同じ韻母でも介音ゼロと介音-i-や-j-の字は諧声系列を形成しうるのに対し、介音ゼロと介音-u-や-w-の字は諧声系列を形成しえないように見えることである。例えば *tan* と *tjan* の間には「單」「旦賣」と「戰」「釐」のような諧声系列が多く見られるのに対し、*tan* と *tuan* の間に諧声系列を見出すことは困難である。*tuan* には「崑」など別の諧声符が控えている。

先述のとおり、李方桂の再構した上古音では牙喉音系声母の場合、*k*-と *kw*-のように開合の区別を声母に負わせたが、開合の対立は中古舌歯音系声母にも存在する。李方桂はその場合に限り（Karlgren 同様）上古韻母に介音-u-を認め、開合の対立を介音の有無に負わせている。その後、中古音舌歯音合口に対応する上古音（元部や歌部など）に「円唇母音」を再構する S. Jakhontov の説が広く受け入れられるようになり、介音-u-を認める必要がなくなった。たとえば李方桂と（Jakhontov を継承する）W.H. Baxter の説を較べてみれば以下の通りである。

中古	開口	合口	合口	開口	合口	合口
	多	坐	墮	丹	團	段
李	<i>tar</i>	<i>dzuarx</i>	<i>duarx</i>	<i>tan</i>	<i>duan</i>	<i>duanh</i>

Baxter    taj            dzojʔ    lojʔ            tan            don            dons<sup>(4)</sup>

これは、Karlgren や李方桂が（清朝考証学者の研究結果の基礎の上に）同一の主母音で再構した韻部に、二つ以上の母音を再構することを意味する。この再構により、「同じ韻母でも介音ゼロと介音-*j*-や-*j*-の字は諧声系列を形成しうるのに対し、介音ゼロと介音-*u*-や-*w*-の字は諧声系列を形成しえないように見える」という現象も、多くの場合、ずっと理解しやすくなったと言えよう。更に今では介音-*j*-や-*j*-の存在を認めない学説も出現している。その場合、主母音に長母音と短母音の区別を認めることになる。短母音という条件のもと、後に介音-*j*-や-*j*-が発生したと見る学説である。長母音の表し方は（たとえば長い *a* の場合）*aa*、*ā*、*â* など様々である。

	李1971	Baxter1992	Starostin1989など
單	tan	tan	tān （または taan    tân）
戰	tjanh	tjans	tans
團	duan	don	dōn （または doon    dōn）
專	tjuan	tjon	ton

### 3. 押韻について

詩経を始めとする先秦の有韻の詩や文について言えば、諧声符や通仮の場合とは違って、主母音・韻尾・声調<sup>(5)</sup>が同じでありさえすれば介音の有無に拘わらず（-*j*-や-*j*-、-*u*-や-*w*-があるか否かに拘わらず）押韻できるはずである。

上述の学説のように、中古合口字に対応する上古音に異なった母音を再構するということは、押韻においても中古開口字と中古合口字（の一部）がそれぞれ別にまとまって押韻することが期待できることを意味する。逆に言えば、確かにそのような傾向があるからこそ、異なった母音を再構できたとも言えよう。たとえば詩経では以下のように中古合口字を中心とする押韻が見られる（Baxter1992附表により幾組か抽出）。

中古合口字を中心とする押韻 -on

轉、卷、選（邶風・柏舟） 溥、婉、願（鄭風・野有蔓草） 變、婉、選、貫、變<sup>(6)</sup>、亂（齊風・猗嗟） 婉、變、卬、弁（齊風・甫田） 冠、變、溥（檜風・素冠） 館、亂、緞（大雅・公劉）

中古開口字を中心とする押韻 -an

乾、嘆、嘆、難（王風・揚之水） 粲、爛、旦（唐風・葛生<sup>(7)</sup>）

ただし、これらの新学説でも、次のように上古のどこかの段階で円唇母音が合口介音を伴う母音に変化したと考えている。

元部 -on → -uan (wan)

歌部 -oj → -uaj (waj)

たとえば楚辞では「搏」が「蘭」(元部-an)と押韻しており、戦国時代、両者はすでに同じ主母音になっていた可能性がある(おそらく「搏」don → duan)。

#### 4. 上古音の韻部と開合

ここで楚簡を始めとする出土資料の通仮例の認定に当たって開合の問題がどう関わってくるのかについて上古音の側から考えてみたい。まず現在ほぼ定説となっている上古の韻部は以下のとおり。

陰類： 魚部 支部 之部 侯部 宵部 幽部 歌部 脂部 微部  
 入類： 鐸部 錫部 職部 屋部 藥部 覺部 祭月部 質部 物部 葉部 緝部  
 陽類： 陽部 耕部 蒸部 東部 中部 元部 真部 文部 談部 侵部

先述のとおり、現在では一つの部に二つ以上の主母音を認めることもありうる。以上のうち侯部屋部東部、幽部覺部中部、宵部藥部、葉部談部、緝部侵部には開合の対立、厳密に言えば、牙喉音声母におけるK-とKw-の対立はない。すなわちKw-の系列は現れない(于母はありうる)。ほとんどの研究者がこれらの韻部に円唇母音・唇音韻尾など、すなわち他の合口の要素と反発しあう音を再構している。たとえば入類に対する李方桂とBaxterの再構を挙げれば以下のとおり<sup>(8)</sup>。

	鐸部	錫部	職部	屋部	藥部	覺部	祭月部	質部	物部	葉部	緝部
李	ak	ik	ək	uk	akw	ək	at	it	ət	ap	əp
Baxter	ak	ek	ik	ok	awk	uk	at	it	it	ap	ip
					ewk	iwk	et		ut	ep	up
							ot			op	

したがって、開合の対立があるのは以下の諸韻部ということになる：

魚部鐸部陽部	支部錫部耕部	之部職部蒸部	
ak : wak	ek : wek	ik : wik	
歌部祭月部元部	脂部質部真部	微部文部物部	
at : wat/ot	it : wit	it : wit/ut	w-は声母K <sup>w</sup> -系の意味

## 5. 中古音の韻と開合

ここで、楚簡を始めとする出土資料の通仮例の判断に当って、中古音から出発して上古音の開合を考える場合どういうことが言えるのかを考えてみたい。

### 5.1 中古韻母の開合

開合に関して以下のようなことが言える。再構音はほぼ三根谷説<sup>(9)</sup>に拠る。

一、通摂・江摂・効摂・流摂・咸摂は開合の対立なし

東董送屋 auŋ iauŋ 冬○宋沃 auŋ 鍾腫用燭 iauŋ

江講絳覺 auŋ

蕭篠嘯 eu 宵小笑 iau 肴巧效 au 豪皓号 au

尤有宥 iau 侯厚候 au 幽黝幼 ieu

侵寢沁緝 iem

覃感勘合 am 談敢闞盍 am 鹽琰豔葉 iam 添忝柝帖 em

咸謙陷洽 em 銜檻鑑狎 am 嚴儼釅業 iam 凡范梵乏 iam

再構音からもわかるとおり、これらの韻はその韻尾に円唇母音や唇音子音など、合口介音と反発しあう要素を含んでいる。なお東董送屋・三等 iauŋ には上古蒸部・職部・之部の合口字が合流している。たとえば「雄」「弓」「囿」など（「夢」「福」などの唇音字も）。尤有宥 iau には上古之部の合口字が合流している。たとえば「尤」「有」「又」「久」「丘」「牛」など（「謀」「富」などの唇音字も）。それらを除けば通摂・江摂・効摂・流摂・咸摂所属の字について上古の開合の対立を考える必要はないであろう。

二、全体に唇音声母（幫滂並明）は開合の対立なし

これは上古でも同様であったと推定される<sup>(10)</sup>。上古でも唇音声母については開合を考える必要はないということである。

なお、中古の哈海代と灰賄隊が、主母音を等しくする開口・合口韻だと仮定した場合、唇音声母に対立があるように見えるが<sup>(11)</sup>、見せ掛けの対立に過ぎないとする研究者が多い。

三、中古音すなわち『廣韻』で以下の韻に属する字は上古でも合口的であったであろうと推定されている。

虞麌遇韻 上古魚部合口と侯部（円唇主母音をもつ）に由来

灰賄隊韻（微部合口・之部合口に由来）

諄準稔術韻 文吻問物韻 魂混恩沒韻（文部合口に由来）

桓緩換末韻（元部合口に由来）

戈果過韻（歌部合口に由来）

たとえば周易の頤卦初九の「觀我朵頤」の「朵」（中古果韻端母合口、上古歌部）が楚簡では「𣎵」、馬王堆帛書では「𣎵」に対応する。それらの諧声符「𣎵」「短」が中古桓緩韻端母（上古元部）であることも偶然ではないのである。なお《上海博物館藏戰國楚竹書（以下「上博」と略称）（三）》「恒先」では「短」が「𣎵」と書かれている。

四、中古音で以下の韻は開口のみ。上古でも開口のみと推定される。

之止志 魚語御 哈海代 真軫震質<sup>(12)</sup> 臻櫛 欣隱焮迄 痕很恨 寒旱翰曷 歌哿箇

五、以下の韻には開合の対立あり

支紙寘 脂旨至 微尾未 齊齋霽 祭 泰 佳蟹卦 皆駭怪 夬 廢 元阮願月 刪潛諫鎋  
山産欄黠 先銑霰屑 仙獮線薛 麻馬禡 陽養漾藥 唐蕩宕鐸 庚梗映陌 耕耿諍麥 清靜勁昔  
青迥徑錫 蒸拯證職 登等嶝德

これらの韻に属する字に関しては、開合が異なれば、上古の韻部が同じでも通仮の可能性は低いということになる。

六、模姥暮は上古では開合の違いがあったものが合流している。諧声符により判断。たとえば「願」は「寡」（中古馬韻合口見母、上古魚部）との通仮関係から見て上古合口的と推定される。ただし研究者により開合の帰属に関して意見の一致しない字もある。「乎」<sup>(13)</sup>など。

以上から、中古音から出発しても、ある程度は上古の開合について予想することができる。

## 5.2 中古声母と諧声系列

次に通仮の可能性を有する声母の通用範囲を考えてみたい。あらゆる例を並列的に挙げてしまうと収拾がつかなくなる恐れがある。私見では、以下のように3段階に分けて考えるとわかりやすいと思われる。

### 5.2.1 第1レベル

最も一般的な通用範囲である。以下のそれぞれの系列の中では、諧声系列の場合と同じく、韻

部が開合まで含め同じであれば、ほぼ自由に通仮できるはずである。以下、中古の声母の下に諸声系列の例字を並べ、更に楚簡での同様の通仮例を挙げる。なお中古来母 (l-) は普通、来母同士で諸声系列や通仮の関係を為す。それ以外の声母との関連はレベル 2・3 で扱うこととする。以下、諸声系列の例字は特に断らない限り『説文』所収字。各声母右の再構音は中古音（ほぼ三根谷説に基づく<sup>(14)</sup>）、下は想定される上古音（ほぼ Baxter1992の説）。

## ①唇音の系列

幫 p	滂 p'	並 b	明 m
*p	ph	b	m
伯	魄	白	陌

来母との関連でレベル 3 にも現れる。幫滂並と明母の交流はそれほど頻繁ではない。明母はレベル 2 にも現れるので注意が必要。

## ②牙喉音の系列

見 k	溪 k'	群 g	疑 ŋ	影 ʔ	曉 x	匣 ɣ	于 ɣ
*k	kh	g	ng	ʔ	x	g	w
經	輕	瘳	姪	莖	蛭	脛	
	誇			汗	吁	鄠	于

来母との関連でレベル 3 にも現れる。疑母・曉母はレベル 2 に現れることも多く、注意が必要。

この範囲での通仮例（原文引用の字に下線を引いたものは元の資料で字体が相当違うもの。以下同）：

幾(豈)不有匣也 《上博三》「仲弓」

幾：見母 豈：溪母

魄我尸=(威儀隸隸 {詩邶風柏舟}) 《上博二》「民之父母」

魄：見母 (鬼) 威：影母

是胃(謂)寵辱纓 (驚) 郭店「老子」

纓：影母 驚：見母

一斛(握)于笑 《上博三》「周易・萃卦」

斛：匣母 握：影母

章(回) 《上博五》「弟子問」

章：于母 回：匣母

化(禍)莫大盧不智足 郭店「老子」

化：曉母 禍：匣母

## ③ 齒音の系列

精 ts 清 ts' 從 dz 心 s 莊 ts̥ 初 ts' 崇 dz 疏 ʃ  
 \*ts tsh dz s tsr tshr dzt sr  
 借 錯 籍 昔 斲 籍 齧

このうち特に心母・疏母はレベル2・3に現れることも多く、注意が必要。

通仮例：

未淒(濟)征凶、利涉大川 《上博三》「周易・未濟卦」

淒：清母 濟：精母

思(使)民不疾 《上博二》「容成氏」

思：心母 使：疏母

## ④ 舌音の系列 (AB2系列あり)

端 t 透 t' 定 d 知 t̥ 徹 t̥' 澄 d̥ 章 ts̥ 昌 ts̥' 常 dz̥ 書 ʃ 船 ʃ 邪 z 以 j  
 A \*t th d tr thr dr tj thj dj stj  
 都 屠 豬 褚 儲 者 禪 署 暑  
 B \*hl l hlr lr hlj Lj lj  
 胎 殆 答 治 始 倡(似) 怡

このうち特に透母(徹母・昌母も)および書邪以の諸母はレベル2に現れることも多く、注意が必要。章昌常書船はレベル3の②「第一口蓋音化」にも関連する。ABは戦国時代すでに合流し始めていたかも知れない。たとえば「周易・夬卦」九二の「惕號」(馬王堆帛書では「惕號」)が《上博三》では「畜號」で、また《上博三》「彭祖」では「墜」が「椎」で書かれている。「惕」「墜」はB系、「畜」「椎」はA系と推定される。

通仮例：

A 宐(濁)氣生地、清氣生天 《上博三》「恆先」

宐：章母 濁：澄母

B 無夜(舍)也 《上博二》「恆先」

夜：以母 舍：書母

B 亡馬不由(逐) 《上博三》「周易・睽卦」

由：以母 逐：澄母

## ⑤ 泥母の系列

泥 n 娘 ŋ 日 ñ  
 \*n nr nj



奴 女 如

この系列はレベル2に現れることも多く、注意が必要である。

### 5.2.2 第2レベル

諸声符の上で泥母系、疑母系、明母系、来母、舌音B系(l-)が、それぞれ心母、疏母、曉母などと交流しうる。無声鼻音<sup>(16)</sup>・無声流音や接頭辞s-そして介音-r- -j-を想定することにより、規則的な理解が可能となった。たとえば、

#### ①\*n-

泥 n	娘 n	日 n	透 t'	徹 t'	昌 ts'	書 s	心 s	疏 s	曉 x
*n	nr	nj	hn <sub>1</sub>	hnr	hnj	snj		hn <sub>2</sub>	
奴	女	如	帑	絮		恕	絮		
難			攤					漢	

郭店や上博の楚簡で「仁」(中古日母)「年」(中古泥母)が「愬」(「身」は中古書母)で書かれることも、この範囲の中にある。

#### ②\*ng-

疑 n		透 t'	徹 t'	昌 ts'	書 s	心 s	疏 s	曉 x
*ng		hng <sub>1</sub>	hngr		hngj	sngj	sng <sub>2</sub>	hng <sub>2</sub>
逆		柝	斥	斥		訴	朔	
堯					燒		曉	

なお中古日母の「熱饒」はレベル3の②で扱うべきものである。

#### ③\*m-

明 m		透 t'	徹 t'	昌 ts'	書 s	心 s	疏 s	曉 x	來 l
*m		hm <sub>1</sub>	hmr		hmj	sm	smr	hm <sub>2</sub>	
亡						喪	荒		
萬邁			蝨					厲	

通仮例：

中(仲)弓曰：“敢昏(問)為正(政)可(何)先？ 《上博三》「仲弓」

問：明母 昏：曉母

王遲(徒)尻於坪瀕 《上博四》「昭王毀室」

尾：明母・微母 徒：心母

## ④\*r-

來 l	透 t'	徹 t'	昌 ts'	書 ś	心 s	疏 ş	曉 x	
*r	hr <sub>1</sub>	hrr		hrj	srj	srr	hr <sub>2</sub>	
禮	體							
釐								釐
麗								醜

## ⑤\*l- 「心疏曉」以外はレベル1で言及済み

定 d	澄 d	透 t'	徹 t'	昌 ts'	書 ś	心 s	疏 ş	曉 x	邪 z	以 j
*l	lr	hl <sub>1</sub>	hlr		hlj	slj	slr	hl <sub>2</sub>	Lj	lj
墮	髻	橢				髓		蔭	隨	穉

通仮例：

臯陶(咎秀) 《上博二》「容成氏」  
 陶：定母B系 秀：心母

## 5.2.3 第3レベル

第1・第2以外のものがここに分類される。

## ①中古牙喉音系/唇音系と来母・疏母など

幫 p	並 b	明 m	見 k	溪 k'	群 g	疑 ŋ	曉 x	來 l	疏 ş	徹 t'	書 ś	以 j
*pr-	br-	mr-	kr-	chr-	gr-	ngr-	xr-	r-	sr-	hrrj	hrj	rj
		繆	膠		瑯		嚙	蓼				
	龐		龔					龍	瀧	寵		
					樂		樂			爍	藥	

「各」(見母)と「洛」(来母)、「監」(見母)と「藍」(来母)のような例は Karlgren 以前から既に、複声母の存在を伺わせる例として、たびたび取り上げられてきた。来母を r-または Cr-で再構するとともに二等韻や三等韻に対応する上古音に-r-の要素を考えるようになってからは、無理な複声母を認める必要は大幅に減少した。たとえば二等韻の「監」は kram、「藍」は ram(或いは C-ram)と再構される。上掲の例は r-を共にすることによる関連だと思われる。

二等韻 蠻 mr- 膠 kr- 龐 br- 瀧 sKr-  
 三等韻重紐 B・舌上音 變 prj- 繆 mrj- 寵 hrrj-

## ②中古牙喉音系と正齒音系 いわゆる「第一口蓋音化」(平山 2006参照)

支(見母)：技(群母) 稽(溪母)：旨(章母) 糾(見母)：収(書母)

堯（疑母）：饒（日母）

これらは多くの場合、「Kj- + 前舌母音→章母系」という条件、或いは口語層という条件を前提に考えることができる。中古牙喉音系と章母系のすべてが通用できるわけではない。

この変化は戦国時代すでに始まっていた可能性がある（古屋2006）。たとえば、

是以成倉(滄)然(熱) 郭店楚簡「太一生水」

「熱」（中古日母）は「藝」（中古疑母）などから見て本来は牙喉音系の声母を持っていたと推定されるのに対し、「然」（中古日母）は「難」（「難」は中古泥母）という『説文』の或体からもわかるとおり、泥母系（レベル1⑤）の声母を持っていたと推定される。「熱」と「然」が通用するからには「熱」が既に第一口蓋音化を経ていると考えるのが自然であろう。

「熱」ngjet? → njat?      「然」njan → njan

### ③中古牙喉音系などと中古心母

牙音と心母    及：鞞    契：楔    堪：榘

喉音と心母    血：恤    戔：歲    員：損    亘：宣    伊：泗<sup>(16)</sup>

これらは接頭辞 s-により解釈されるのが普通である。たとえば、

契 khets→k<sup>hei</sup> 去    楔 sket→set    或いは 齧 nget→nget    楔 snget→set<sup>(17)</sup>

ただし接頭辞 s-の基本義は必ずしも明らかでない。

### ④以母（喻母四等）と牙音系

欲（以母）：谷（見母）

以母の多くはレベル1の④Bで説明されるが、牙音系との交流は別に考えるべきであろう。

### ⑤その他

#### ⑤-1 中古牙喉音系と舌音系

牙喉音と端母    合：答

牙喉音と透母    號：饗    君：涪    含今：貪

レベル2の④を応用すれば解釈可能かも知れない。

含 gim    今 kjim    貪 hngim? (中古透母へ)

牙喉音と定母    貴：隴

#### ⑤-2 中古唇音系と舌音系

缶（幫・非母）：陶（定母）    聘（滂母）：騁（徹母）など

#### ⑤-3 中古舌音系・正齒音系と齒音系

佳（章母）：崔（清母）など

## ⑤-4 中古牙喉音系と齒頭音系

刑(匣母):井(精母) 揖(影母):緝(清母) 泊(見母):自(從母)など

## ⑤-5 中古唇音系と齒音系

鼻(並母):自(從母)など

これらはいまだ必ずしも納得のいく説明が為されたとは言えないもの。

「崔」「佳」などはそれぞれが別の諧声符と見ることもできるのではなかろうか。いずれにせよレベル3の例を根拠に拡大解釈はしない方が良いと思われる。たとえば「刑(匣母):井(精母)」の例から「中古牙喉音系と齒音系は通用する」と短絡的に結論して議論を進めるようなやり方は慎まねばならないであろう。

## 6. 応用篇

『上海博物館藏戰國楚竹書』を中心とする資料の通仮例のうち開合に関係するものについて、上古音研究の立場から気がついたことを記してみたい。

## 6.1 「享」「槨」

趙立偉2002によれば睡虎地秦簡(秦律十八種)の「棺<sup>(18)</sup>享」の「享」(陽部曉母)は「槨」(鐸部見母)の通仮だそうである。確かに陽部と鐸部は陽入対転の関係にあり、曉母と見母はレベル1②(牙喉音系)の範囲にあるとはいえ、「享」は開口字、「槨」は合口字であり、とても通仮とは思えない。

そもそも通仮字の研究において最初に明確にしておくことがある。古屋1987では、出土文献資料の解読の障碍となる字体上の様々な状況を次のように分類した(例は今回のもの)。

		例
I 異体		頌(容) 術(道)
II 通仮	a 字体の上で関連のないもの	句(後) 由(逐)
	b 字体の上で関連のあるもの	考(孝) 通(踊)
III 偏旁 <sup>(19)</sup>	a 同音と推定されるもの	勿(物) 胃(謂)
	b 非同音と推定されるもの	古(故) 可(何)
IV 誤字		沸(涕) 大(天)

通仮に見えてもII bは誤字である可能性が相対的に高く、IIIは単なる省略の結果、偏旁のみとなったという可能性が高い。それらを例として声母や韻部の交流について語るのは危険である。

通仮字を音韻研究の資料とする場合、最も有用なのはⅡaである。

さて「享」「榔」はⅢbの例である。趙立偉2002は他にも「失(佚)」や「寺(待)」のような例を挙げ、書母・以母の交流、邪母・定母の交流について語り、「徐(除)」では邪母・澄母の交流について語るが、これらはⅢbやⅡbの例なので音韻史研究にとってはあまり意味がない。

## 6.2 「於」「汚」

古音於汚惡、皆在影紐魚部、三者於音可通（劉釗2004「容成氏釋讀一則」p351）

「影紐魚部」という情報のみでは通仮の決め手とならない。「汚」の諧声符「于」（中古虞韻）は上古で合口的なので、開口的な「於」「惡」とは通用できないはずである。『楚辞』「漁父」の「安能以皓皓之白、而蒙世俗之塵埃」が『史記』で「安能以皓皓之白、而蒙世俗之温蠖」（索隱：温蠖、猶愠憤也）となっていること、更に『韓詩外傳』に類型表現「莫能以己之皤皤、容人之混汚然」が見えることも参考になる。「温」（烏渾切）「混」、「蠖」（烏郭切）「汚」ともに中古合口字である（湯炳正1984）。なお銀雀山漢簡に「斥汗食黃其身」（63）の句が見え、「斥汗」が「尺蠖」（尺取虫）を表しているのも興味深い。「芋」（中古虞韻于母、上古魚部）が「華」（中古麻韻匣母合口）の通仮字となる例もある。たとえば、

邦四益、是謂方芋（華）、雖盈必虛 《上博五》「三德」

## 6.3 「𠂔」「誇」

𠂔𠂔（誇）賢 《上博（三）》彭祖

「富を逐ふことなかれ」に続く句であり、「賢を誇るなかれ」で良く通じるとはいえ、「𠂔」の諧声符「可」（中古歌韻上声開口溪母、上古歌部）と「誇」（中古歌韻溪母合口、上古魚部）を関連づけるのは難しいのではないか。「𠂔」は『周易』大畜卦・初九では「荷」の通仮字となっている。林志鵬2007/8の言うとおりに、ここは「倚」の通仮であろう（「賢に倚るなかれ」）。

## 6.4 「惑」「赦」

老=慈幼、先又(有)司、舉賢才、惑(赦)過與<sup>(21)</sup>臯 《上博三》「仲弓」

最初、「惑」（之部職部）は「赦」（魚部鐸部）の通仮と解釈されたが、韻部の違いもさることながら、之部や魚部については開合を念頭に置く必要がある。「惑」は明らかに合口的な字（中古一等合口匣母）である。《上博三》刊行後すぐに陳劍氏が「簡帛研究」上で「上博竹書《仲弓》篇新編釋文（稿）」（2004年4月）を発表し、「惑過」を「宥過」（「過ちをゆるす」）の通仮と看破したのは流石であった<sup>(21)</sup>。なお「惑」は楚簡で「又」の通仮字となることもある。

### 6.5 「貴」「伊」

今豎刁倂（匹）夫、而欲智萬乘之邦而貴尹、其爲災也深矣

《上博五》「鮑叔牙與隰朋之諫」

王三峽2006/3は「貴尹」を「伊尹」の通仮と見る。「貴」は物部見母、「伊」は脂部影母であり、韻部の違いもさることながら、前者は合口的、後者は開口なので通仮はありえないであろう。ただし「貴尹」をどう解釈するかについてまだ定論はないようである<sup>(22)</sup>。

### 6.6 「沽」「孤」

寡韻則沽 《上博五》「弟子問」

同じ見母魚部でも上古で「孤」は合口的（中古麻韻合口の「瓜」が諧声符）なので開口的な「沽」とは通用しないはずである。陳偉2006/2の指摘通り「固」の通仮であろう。この句は「寡聞であれば融通がきかない」の意。

### 6.7 「襄赳」「良翰」

公強起、違席曰：「善哉。吾用晏子是襄赳之言也」 《上博六》「競公瘡」

何有祖2007/7は「從巨之字上古音多在元部匣紐、翰也屬元部匣紐、兩者為雙聲疊韻」と言い、「襄赳」を「良翰」（「良佐」すなわち良い補佐の意）の通仮と見たが、いくら同じ「元部匣紐」でも、「巨」は合口的、「翰」は開口であり、無理があろう。林文華2008/7のように「襄桓」（「修和」「咸和」「變和」などの意味、「和」も合口）の方向で解釈する方が良いのではないか。

### 6.8 「縻」「輟」

氏（是）胃（謂）絕縻（輟） 《上博三》「彭祖」

「縻」は祭部清母、「輟」（或いは「綴」）は月部端母（中古知母）であり、齒音（レベル1-③）と舌音（1-④）の違いのみならず、「縻」は開口、「輟」「綴」は合口的な字である。文脈的には「遭殃」「不長」より甚だしい段階を表すらしいので、ここは「縻」<sup>(23)</sup>すなわち「殺」で良いのではないか。『上海博物館藏戰國楚竹書（一～五）文字編』（作家出版社、2007）の釈文も「絶殺」である<sup>(24)</sup>。馬王堆帛書「十大經」に「高而不已、天闕之。廣而不已、地將絶之。苛而不已、人將殺之」とあるのも参考になる。

### 6.9 「枹契」「虞箕」（信陽楚簡）

上古音「枹」屬見母魚部，「虞」屬群母魚部，二字聲母都是喉音…上古音“巽”“選”都是心母元部字。在形聲字裏，溪、心二母有通諧的現象。例如“契”屬溪母，从“契”得聲的“楔”“楔”屬心母。元月二部陽入對轉。頗疑“枹契”應當讀“虞箕”（李家浩1998）

「𣪠」と「虞」は確かに同じく魚部所属字とはいえ、前者は合口的、後者は開口字である。「𣪠」を「𣪠」（「巽」は合口的）の通仮と見るのはなおさら無理であろう。むしろ「𣪠」を「虞」の通仮と見ることが可能。「虞」は鐘磬を掛ける木の杵。

### 6.10 「識」「淺」

其賞識且中、其誅重且不察、死者弗收、傷者弗問、既戰而有怠心、此既戰之幾。

《上博四》「曹沫之陳」

積文以来多くの人が「識」（中古泰韻呼會切、『説文』：聲也）を「淺」（七演切）と解釈しているが、無理がある。おそらく「歳」（心母祭月部）と「淺」（清母元部）の声母・韻部の類似性に拠るものと思われるが、「歳」は合口的な字である。また心母はレベル2・3に現れることも多いので注意が必要である。「歳」は諧声系列の中で牙喉音と関連する。「識」は祭月部合口の「越」の通仮ではなかろうか。似たような表現として「歸生聞之、善為國者、賞不僭而刑不濫。賞僭則懼及淫人、刑濫則懼及善人」（左傳襄公二十六年、訓読：歸生（聲子）これを聞く、善く國を為むる者は、賞僭<sup>なが</sup>はずして刑濫<sup>みだり</sup>ならず。賞僭へばすなはち淫人に及ばんことを懼れ、刑濫なればすなはち善人に及ばんことを懼る）、「賞不僭、刑不濫也」（毛詩商頌「不僭不濫」、毛傳）がある。「賞僭<sup>なが</sup>ふ」と読むとおり「僭越」の意味とは異なるが。

## 7. 今後の課題

以上からも、上古で声母・韻部が同じでも開合が異なると通用しにくいことは明らかであろう。ただし諧声系列にせよ通仮字にせよ、開合の通用例が皆無というわけでは勿論ない。たとえば『説文』所収字において、①諧声符が中古開口でも、諧声系列の中に中古合口字が混ざる場合、或いは、②諧声符が中古合口でも、諧声系列の中に中古開口字が混ざる場合が皆無というわけでもない。たとえば以下のとおりである。反切は『広韻』による。

①開口	合口	上古	開口	合口	上古
支 章移切	頰 丘弭切	支部	豈 祛豨切	磴 五對切	微部
技 渠綺切	廢 古委切	支部	隱 於謹切	穩 烏本切	文部
此 雌氏切	漿 即委切	支部	自 疾二切	詎 荒内切	脂部
熱 如列切	蕪 如劣切	祭月部	里 良士切	悝 苦回切	之部
害 胡蓋切	豁 呼括切	祭月部	景 居影切	憬 俱永切	陽部
贊 則吁切	鑽 借官切	元部			
②合口	開口	上古			
圭 古攜切	崖 五佳切	支部			

玄 胡涓切      牽 苦堅切      真部  
官 古丸切      菅 古顔切      元部

このうち「詎」は『説文』では「讀若反目相睽」と言う。「睽」(中古代韻開口来母)のように発音されたとすれば、中古の「荒内切」(中古隊韻合口曉母)とはほとんど関連しない音である。字音の伝承の過程で齟齬が生じたものであろうか。中古音との音韻対応を基礎とする上古音研究の根幹に関わる問題といえよう。なお《上博五》「三德」では、この字が「計」の意味で使われている<sup>(25)</sup>。「詎」が「計」(中古霽韻開口見母)のような音を持つとすれば、「洎埒泉」(中古至韻開口見母 B)などと関連させることができ、理解しやすくなる。ただし「自」(従母)と「洎」(見母)はレベル3の諸声現象である。

通仮例の中にも、問題をはらむものが皆無というわけでは勿論ない。胡・韓1988によれば、阜陽漢簡『詩経』では召南「殷其雷」を「印其離」に作るという。「離」は中古支韻開口来母(上古歌部)、「雷」は中古灰韻合口来母(上古微部)の字である。理解に苦しむ例という他ない。馬王堆帛書『十大經』にも「規僂(蚊蟻)」の例があり、「規」は中古支韻合口見母 A(上古支部)、「蚊」は中古支韻開口見母 A(上古支部)の字である。上述「技」(中古渠綺切、開口)、「廢」(中古古委切、合口)も併せて考えるならば、「支」の諸声符をもつ字には開口・合口の二系統の音があったということになるのであろうか。今後の課題としたい。

#### 注

- (1) 諸声符については河野1952など。
- (2) 「類似」とは調音点が等しいことを優先するもの。
- (3) 祝敏申2001、p418。
- (4) 問題点は牙喉音系声母の場合、中古の合口韻から上古音に遡ると(元部の場合)  $K^{van}$  なのか  $Kon$  なのか、或いは(歌部の場合)  $K^{vaj}$  なのか  $Koj$  なのか決めがたいこと。普通は押韻での状況により決定。開口-an/-jan、-aj/-jaj などと押韻することがあれば  $-^{van}$ 、 $-^{vaj}$  と再構、そのような押韻例がなければ、或いは他の積極的理由があれば、-on、-oj と再構する。たとえば「過」(中古一等合口戈韻平去声見母)は詩経で「歌」[沓](中古一等開口歌韻平声、上古-aj)と押韻するので  $koj$  ではなく  $k^{vaj}$  と再構される。
- (5) 声調は必須要件でないように見えることもあるが、類としてまとまることが多い。
- (6) 毛詩では「反」。Baxter の「變」は韓詩の異文を採用したもの。
- (7) もちろん両者が混ざる例もないわけではない。たとえば「怨岸泮宴晏旦反」(衛風・氓)。
- (8) 頼1957の再構によれば屋部 auq、藥部 euq、覺部 əuq、葉部 ap、緝部 əp。
- (9) 三根谷徹『越南漢字音の研究』(東洋文庫、1972)などによる。以下同。
- (10) たとえば「「皮」は中古音において開口字、「跛」は合口字で通じない」「「某」は中古音において開口字、「誨」は合口字で通じないが…」(曹峰2005、p65、p75)のような表現が見られる。「某」「皮」「跛」は唇音字なので開合を云々する必要はないのである。なお、同じく明母字の「毎」を諸声符にとる「海」と「誨」が中古でそれぞれ曉母開口  $xai^h$ 、曉母合口  $xuai^h$  に対応することも唇音字が開合に関して中立的であったことを物語る。
- (11) 海韻の莫亥切(明母)と賄韻の武罪切(明母)、海韻の薄亥切(並母)と賄韻の蒲罪切(並母)など。



- (12) 『廣韻』において個別的には合口字が混じっていることがある。たとえば軫韻于敏切、殞隕筠韻貫などは于母合口である。そもそも隋の『切韻』では、真軫震質の中に後の諄準稕術が未分化の状態に含まれていた。
- (13) 楚簡の「容成氏」には「於是乎」を「於是於」と書いた箇所があり、「乎」が開口的であった可能性を示す（もちろん誤字の可能性もあるが）。「乎」に対応する字として「虎」を諧声符に持つものも多い。
- (14) ただし常母と船母の再構音は最近の学説に従う。
- (15) 野原将揮2008。hn<sup>1</sup>とhn<sup>2</sup>は鄭張2003のhnとnhに相当。他もこれに準じる。
- (16) 「容成氏」では「伊尹」が「泗尹」で書かれている。「泗」は心母。また『説文』十一によれば「伊」の古文は即ち「死」の古文である。
- (17) L.Sagart1999, p65による。
- (18) 実際には「縮」の字である。
- (19) 省略の結果、偏旁のみとなったもの。厳密には偏旁の添加という項目も必要。
- (20) 厳密には「與」の下に「止」の字体。
- (21) 小寺敦・井上巨・大西克也2007も「曹沫之陳」の「或」を「宥」と解釈している。
- (22) 蘇建洲「《上博(五)競建内之》“亥弋”字小考」(簡帛網2006年7月23日)によれば「潰濩」(宦官になる?)と解釈する研究者もいるとのこと。
- (23) 楚簡の「蔡」は甲骨文字と同様、「殺」と同じ字体。
- (24) ほかに「絶世」「絶祭」などと読む説もある。直接の関係はないかも知れないが、郭店楚簡「六徳」に「爲父絶君、不爲君絶父。爲昆弟絶妻、不爲妻絶昆弟。爲宗族殺朋友、不爲朋友殺宗族」とあり、喪服関連の術語として「絶」と「殺」が並んで使われている(劉樂賢2002)。林素英2005は喪服関連の術語という説を否定。
- (25) 憲(喜)樂無董(限)斥(度)、是胃(謂)大沘(荒)、皇天弗京(諒)、必復之以憂喪。凡飢(食)飲無量(計)、是胃(謂)滔臯、上帝弗京(諒)、必復之以康、上帝弗京(諒)、以祀不享。

### 参考文献

- 曹峰・李承律2005『上海博物館藏戰國楚竹書《昔者君老》《容成氏》(上)譯注』上海博楚簡研究会編
- 陳劍2004「上博竹書《仲弓》篇新編釋文(稿)」簡帛研究2004/4/18
- 陳偉2006「上博五《弟子問》零釋」簡帛網2006/2/21
- 古屋昭弘1987「漢字の仮借用法について」『出版ダイジェスト』1245
- 2003「出土文献と上古中国語の音韻について」『中国文学研究』29
- 2006「儒教と中国語学」『近世儒学研究の方法と課題』汲古書院
- 何有祖2007「《景公瘞》的“良翰”」簡帛網2007/7/25
- 平山久雄2006「河野六郎博士の「第一口蓋音化」説について」『東ユーラシア言語研究』1、好文出版
- 胡平生・韓自強1988『阜陽漢簡詩經研究』上海古籍出版社
- 季旭昇主編2003『上海博物館藏戰國楚竹書(二)讀本』萬卷樓
- 荊門博物館編1998『郭店楚墓竹簡』文物出版社
- 小寺敦・井上巨・大西克也2007『上海博楚簡《彭祖》《内豊》《曹沫之陣》譯注』上海博楚簡研究会編
- 河野六郎1952諧声声符に見られる直拗交替について、『竹田博士還暦記念中国文化研究会論文集』、東京文理科大学中国文化研究会
- 李方桂1971『上古音研究』『清華學報』新9卷1・2合巻、のち北京商務印書館、1980
- 李家浩1998「信陽楚簡“樂人之器”研究」『簡帛研究』3
- 林素英2005郭簡“爲父絶君”的喪意義、『簡帛研究』2002/2003
- 林文華2008「《上博六・景公瘞》“吾用晏子是襄桓之言也”新解」簡帛網2008/8/02
- 林志鵬2007楚竹書《彭祖》考論(一)——兼論《漢志》“小説家”之成立 簡帛網2007/8/18
- 劉釗2004「容成氏釋讀一則」『上海館藏戰國楚竹書研究續編』上海書店出版社

- 劉樂賢2000「郭店楚簡《六德》初探」『郭店楚簡國際學術研討會論文集』湖北人民出版社
- 馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書』(一)~(六) 2001~2007上海古籍出版社
- 野原將揮2008「無声鼻音考—上古音声母体系からの一考察—」『開篇』27
- 賴惟勤1957「上古中国語の韻母に関する二三の問題」『東洋學報』40-1
- 蘇建洲2008『《上博楚竹書》文字及相關問題研究』萬卷樓
- 湯炳正1984「釋温蠖」、『屈賦新探』
- 王三峽2006「“貴尹”試解」簡帛網2006/3/28
- 吳辛丑2002『簡帛書典籍異文研究』中山大學出版社
- 趙立偉2002「睡虎地秦墓竹簡通假字研究」『簡帛語言文字研究』第一輯
- 張立文1991『周易帛書今注今釋』學生書局
- 鄭張尚芳2003『上古音系』上海教育出版社
- 祝敏申2001「許慎評傳」『古文字研究』21
- S.A.Starostin1989 *Rekonstrukcija drevnekitajskoj fonologičeskoj sistemy* (上古漢語の音韻体系再構)、  
Moscow:Nauka
- W.H.Baxter1992 *A Handbook of Old Chinese Phonology*, Berlin and New York : Mouton de Gruyter
- L.Sagart1999 *The Roots of Old Chinese*, Current Issues in Linguistic Theory, Volume184. Amsterdam and  
Philadelphia : John Benjamins Publishing Company